

# 造形のはじまりを捉え直す ——活動理論の発達論の視点から——

## Recapturing the Beginning of Modeling: From the Viewpoint of Developmental Theory of Activity Theory

浅野 吉英

Yoshihide Asano

### 第1章 はじめに

#### 1・1 造形のはじまりを捉えなおす

造形はどのようにはじまるのか。なぐりがきが造形のはじまりと考えるのが適切なのか。0歳～1歳くらいまでのこどものさまざまな行為の中に造形につながるものは何なのか、知覚、認知、発達をどのように捉えることで造形のはじまりを捉え直すことができるのか考察したい。

造形表現につながる乳児の素材への働きかけは探索行為として扱われている。乳児にとっての探索行為は、外界にあるものを身体によって爆発的に学び続ける貴重な体験である。けれども、乳児の探索行為は、周囲にあるものに触れ、働きかける行為が造形につながる前段階として持つ「意味内容」として十分に捉えられていない。

また、その後になぐりがきの時期は「かくという意識はなく、手を動かす運動感覚を通して機能的な快感を味わう程度」<sup>注1)</sup>と位置づけられている。

0歳児の「感触あそび」に関する実践は、数多く報告されている<sup>注2)</sup>。また、西崎美穂による『描画と痕跡』<sup>注3)</sup>という乳児の素材への行為の痕跡をめぐる詳細な研究から触発された。以上を踏まえ、教育学的観点から造形のはじまりを捉えなおすことを研究課題にしている。

#### 1・2 捉え直しの視点・自発性・情動・知覚・意識

「えがく」「つくる」行為は、表現行為である。その先には、誰もが表現者となって「えがく」「つくる」ことで自らの生活文化を創造できる「創造性の育ち」の視点から捉え直したい。

とは言え、「えがく」「つくる」行為が乳幼児にとっての自発的な行為であることが前提となる。そうすると、乳幼児の自発的な行為はいつはじまるのか、と問う必要がある。ベンジャミン・リベット (Benjamin Libet)<sup>1)</sup>は「自発的な行為を脳はどのように処理しているのか」と言う研究を行い実

験で「自発的な活動に結び付く特定の脳の活動が、行為を促す意志の前に始まっている」という結果を得た。つまり感覚が認知され、その情報で行為を決定する前に「自発的な活動に結び付く脳の活動」ははじまっている、という主張である。そのことを「えがく」「つくる」に結び付けてみると、主体がああしよう、こうしよう決定する前に動きはじめる働きがある、と言える。つまり、認知の前に動きはじめる「えがく」「つくる」自発性を引き起こす脳の働きが考えられる、ということである。認知の前におこる自発的な働きは乳幼児の生きてゆく原動力と言える。

神経学者のリサ・フェルドマン・バレット (Lisa Feldman Barrett)<sup>2)</sup> は、最も基本的な脳の活動を「情動」と言う。「情動 (emotion) は、身体と外界の相互作用をもとに構築された知覚 (perception) で「意識」と同義」である。これには解説が必要である。ここでの「情動」とは、要約すれば「生まれつき組み込まれた、身体の内部で起こる明確に識別可能な現象 (古典的解釈)」ではなく「ある特定の文化のもとで育つことにより、積み重ねた身体的な経験が構築されたとする構成主義的情動理論 (theory of constructed emotion)」に基づいている。そして、そうした具体的経験は「心的インスタンス (instance 個々の具体的な経験に対応する心的構築物)」を脳内に生成する。類似性に基づき束ねられたものが「概念」として本書では使われている。「私たちが見る、聞く、触る、かぐものは、外界に対する反応ではなく、それに関するシミュレーション (予測) であることが明らかにされた。」<sup>3)</sup> だから「知覚」は「意識」で「情動」であり、「自発性」でもある。

このような観点で、なぐりがきの時期の「かくという意識」を捉え直してみるとどうだろう。「なぐりがきの時期には、「かくという意識」はない」と言えるだろうか。赤ちゃんを育てた経験のある人であれば、違和感のある記述である。赤ちゃんには確かな意識があり、胎児も20週で指しゃぶりをし、音を聞くようになることから、生まれたときにはすでに知覚が働いていることは疑いない。同時に意識がある、と考えて不都合はない。なぜなら「知覚」は「意識」「情動」「自発性」でもあるからだ。

### 1・3 発達を規定するのは遺伝か環境か？を超えるには

こどもの発達は、胎児の時から生命として準備された個体発生と外部環境による個体発達とが相互に応答しながら進んでいく。遺伝か環境か、といった二元的な問いは20世紀半ばで姿を消していく。というのも、「発達を説明するものが遺伝学にあるならば、発達研究は「年齢規定のカタログづくり」に終始する」からである。そこで発達研究は「可塑性」に注目する。「生物の「発生過程」で環境の影響で「発達可塑性」を示すことがわかってきたからである。」<sup>4)</sup> ここでの「環境」とは何か。ギブソン (James Jerome Gibson) は「環境」の構成単位を示し「動物と環境とは分離できないペアを構成する」<sup>5)</sup> という前提のもと「刺激作用の源としての環境」と位置付けている<sup>注4)</sup>。知覚者 (生物) は、環境の中を動き探索しながら、外界についての情報を抽出する。ギブソンもまた、知覚者は、「環境」から知覚システムを働かせ、近づいたり、離れたりとといった身体活動を伴って対象に行うことによって抽出した情報を知識化する、ととらえている。これは、先述の「心的インスタンス」と共通している。生物としての人は、生まれた自然的環境だけでなく社会・言語・歴史・文化、等、人それぞれに個別な環境の中で、個別な自己形成をしていく。この複雑さをどのように捉

えればよいのか。

## 第2章 記述・人間形成・発達

### 2・1 遺伝、環境を超えた記述

この困難な記述を人類学者のティム・インゴルド (Tim Ingold) は以下のように言う。

「実際の生においては、環境の中で出くわす条件が、問題となっている諸本来的に備わっているもの（個体発生の中で現れるもの）と同じように、個体発生において形成的な役割を果たしている。」<sup>6)</sup> 「これは、人間存在が遺伝子によってつくられているというよりむしろ環境によってつくられていると言いたいのではない。いのちを持つ他の生きものたちと同じように、人間は内的な要因と外的な要因、すなわち遺伝子と環境の間で起こる相互作用の産物ではない。人間は、人間が直面する条件一過去に自分自身と他者の行動によって累積的に形づくられた条件一に、あらゆる瞬間に反応しながらつくられる自らの生の産物である。」<sup>6)</sup> と述べている。

人間は客観的な対象として同じ場にいる人を観察するのではなく（あるいはそのような観察の記録、民族誌には意味がない）、互いに形成し合う（学び合う）存在なのだとして人類学の参与観察の立場から述べている。このことは、人間形成の学問や、養育や教育の場面にも通じている。養育者や教育者は参与を越えて現実の場面に関わっていく。参与を越えた当事者であれば更に密接な条件と経験が積み上げられていくことになる。このことは、赤ちゃんにとっても赤ちゃんを育てる養育者たちにとっても「あらゆる瞬間に反応しながらつくられる自らの生」を共に創り出す存在として生きていることを意味している。そのように現実に関わりながらこどもとともに創り出す実践と研究の記述を目指したい。

「私たちは絶えず自分自身を創造し、互いを創造し合っている。この集団的な自己形成の過程が歴史である。」<sup>7)</sup> と述べている。

### 2・2 人間形成の基盤としての活動理論

上記インゴルドの言う「個人の発達と集団的な自己形成の歴史」は、活動理論においてもつながり、中心テーマとなっている。

ユーリア・エンゲストローム (Yrjö Engeström) は『拡張による学習』(1999年)の日本語版まえがきの中で「人々は自らの周りの状況を変えることによって、いかに自分たち自身を変えることができるのか」<sup>8)</sup> と活動理論の核心について述べている。こどもたちが、自身の周囲にある対象に向かい状況を変えることによってこどもたちの発達が生まれる、という思想である。訳者であり日本における活動理論を牽引している山住勝広は、この記述について「自らの外部にある対象（具体物）に向かっていく集団的活動によって、対象を変えることで自らを発達させる人間形成の学が活動理論の核心である。」「そこに教育学の足場がある。」<sup>注5)</sup> と述べている。

この「自らの外部にある対象（具体物）」を「変える」ことで、「自らを発達させる」文脈の中に、先述した乳児の探索活動からなぐりがきの時期までの時期を再考したい。

### 2・2・1 痕跡は表現か

乳児において外部にある物質の形を変える行為はどの時期から見られるのだろうか。西崎美穂『描画と痕跡』に詳細な研究がある。第一子の男児を生後1カ月から36カ月までを養育者がビデオカメラ撮影したものの分析である。これを見ると生後2カ月から布を「1 ひっぱる」行為が見られ、「2口に押し当てる」「3かぶせる」「4顔にかぶせる」「5かじる」「6寄せる」などが見られ、身体的発達により最終的に27種の痕跡をつくる行為を分析している<sup>注6)</sup>。

J. J. ギブソンは『生態学的知覚システム』の中で、感覚器官を知覚のシステムとして捉え直している。「感覚する」とは、「何かを検知する」と「感覚作用を有する」と分けている<sup>9)</sup>。前者は「対象の概念化という知的過程を介さずに世界にある対象の情報を得る、検知することが感覚印象を伴わずに起こりうる。」とし、後者は我々になじみ深い「様々な感覚作用をもたらす感覚」である。このことは、先述の『マインドタイム』で示された「自発的な活動に結びつく特定の脳の活動が、行為を促す意志の前に始まっている」とのつながりを推論させる。ギブソンの言う何かを検知する知覚は「行為を促す前に始まっている」知覚システムであるとする仮説である。そうであるならば、乳児が生後2カ月に布を引っ張る行為は、知覚システムによって生後体験された布体験の「心的インスタンス」の結果、手で布を「つかみ」「ひっぱる」ことで生じた外界の変化に「おもしろがる」情動の概念が形成されている、と見ることができる。「おもしろがる」は、「変化を検知する」情動を日本語的にわかりやすく筆者が表現したものである。ここでの「おもしろがる」は「変化する」と同義である。これを活動システムで表すと下図のようになる。

アートにつながる生活文化をつくりだし創造性を育てる造形のはじまりは、このように対象に向かい、対象に働きかけ、対象の変化を「おもしろがる」ことである。布というそれだけでは静的な物質であるが、図1のように生後1カ月の乳児が「ひっぱる」という働きかけにより物質に変化（動き）の痕跡が加えられることが同時に乳児の情動を動かし、行為を繰り返すことで乳児自身が発達していく。

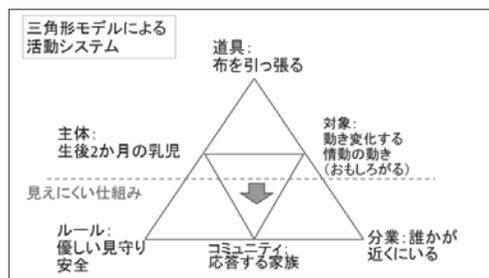


図1：三角形モデルによる活動システム

(資料『拡張による学習』を参考に筆者作成)

この時の乳児の反復性は、「乳児は学んで学んで学び続ける」<sup>10)</sup> ことであらゆる経験を積み重ねていく、この時期の乳児に共通してみられることである。

「痕跡をつける」行為は、乳児にとって「おもしろがる」行為である。この乳児が「おもしろがる」情動を周囲の養育者が「おもしろがった」時、乳児の痕跡行為は表現となる。表現になるのかわからないかは、乳児と共にいる大人次第というのが表現の成立の条件である。ここでの表現の成立を大人の芸術の成立に対応させることに、筆者は意味を感じないからである。

### 2・2・2 外界の対象に向かうこどもたちの先にある学び

幼児教育の祖倉橋惣三は『育ての心』の冒頭で「自らそだつものを育てようとする心」と言った。同時代に、日本における生活文化の創造を実現しようとした実践者に野村芳兵衛（1886年～1986年）がいる。野村は1924年に生まれた池袋児童の森小学校の創設から1936年までの12年間実践を主導し、戦後は岐阜県長良小学校の校長として多くの著書を残している。

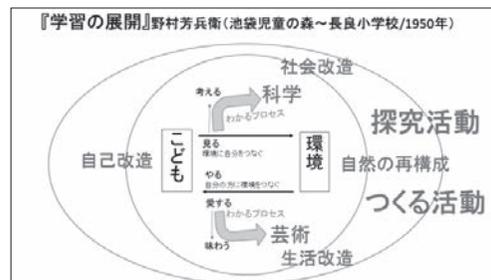


図2：学習の展開

(資料『野村喜兵衛研究大会』を参考に筆者作成)

野村はインゴルドのようにこどもと教員とを分けて教育を考えるのではなく、互いの生を創り出す存在ととらえた。「こどもから学び、こどもと共に創り出す生活文化の創造」と「協働自治」の生活をこども自身で作り、大人から伝える必要のある文化伝承もしつつ、こども自身で教科書をつくりだす実践などを通し「教育意識・指導意識なき教育」をめざした。図2のように野村の目指した教育は、活動理論の核心である社会・文化・歴史を含めた環境にある対象に、こどもたちが仲間と力を合わせ自発的に向かい、その環境を生活文化の創造によって変えていく仕組みを持っている。「探究活動」と「つくる活動」を併せ持つ仕組みを持つところに「造形」を含めた、現代の教育を再構成する際に示唆を与えるモデルになっている。

J. J. ギブソンが「もし諸感覚が知覚システムなら、乳児は誕生時から感覚作用をもつのではなく、誕生後ただちに世界から情報をピックアップしはじめる。」<sup>11)</sup>と述べているように、乳児は「動くもの」「変化するもの」をピックアップし目でおいかける。そして「おもしろさ」を感じ更なる「おもしろさ」を見つけ、対象に関わっていかうとする。この乳幼児によって拓かれた道が、現在の小学校校制度の中で途絶えるのではなく、続くような実践を創り出すことが本研究の目的である。過去にあった実践を掘り起こし、未来へのスプリングボードにすることが実践者に必要な資質である、と考えるからである。

### 2・3 運動の発達においてはどうか

運動発達研究においても発達を自己組織化現象と捉える研究方法への転換が起こっており個の発達の現象への解明へとシフトチェンジしている。これは、いわゆる発達段階が発達の規範とする発達観を見直すことでもある。例えば、乳児に見られる原始反射と呼ばれる歩行は、消失すると考えられていたが、テーレン (Esther Thelen) による歩行発達に関わる乳児のキックについての研究で水中歩行実験では消失しないことが確認されている<sup>注6)</sup>。自己組織化から組み立てると発達モデルは図3のように個別の道筋で歩行・移動と向かう。

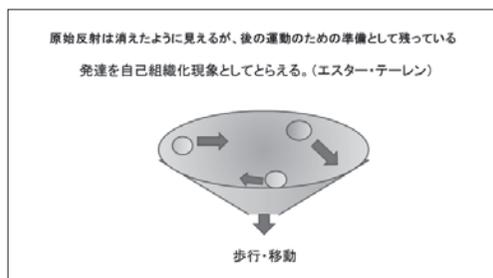


図3：個別な道筋も大きな節目（歩行）に向かう  
(資料『個のダイナミズム』を参考に筆者作成)

個別な道筋の違いはあっても大きな節目として、身体的な発達の中で、「ねがえり」「はいはい」「つかまり立ち」「歩行」がある。この一つ一つの飛躍的な変化は新しい経験を生む「拡張」と考えられる。拡張によって、これまで知覚されていた外界の対象は、新たな身体的経験を伴って、こどもの中で捉え直されていく。この拡張と捉え直しの過程が発達である。

絵の発達においては「なぐりがき」をはじめることが拡張であり発達である。画材をにぎり、紙の上で手を動かすことは、体幹が発達し姿勢が安定してはじまる。目の前で手の動きによって紙に画材の痕跡という変化が生まれる。この動きと変化反復させる意識・情動・知覚の働きが「なぐりがき」である。

つまり、「なぐりがき」は「かくという意識がないのではなく」かくことによって生まれる動的な変化を全身を動かしながらおもしろがっている、のである。「おもしろがる」ことを反復しながら「心的インスタンス」を創り出している。

肩や肘、手首や手、指先の動きが拡張される度に「なぐりがき」は新たな情動をもたらすことになる。そのなかで、こどもたち自身が「おもしろがる」アイデアが生まれたりしたときに応答したり、マンネリ化したときに息を吹き返すような工夫を個別にこどもと共に考えることが実践の広がりにつながる。

### 2・4 象徴機能による概念化作用が絵にもたらすもの

1歳前後から幼児は言葉を話しはじめる。同時にこの時期から「なぐりがき」をはじめめる幼児もいる。言葉には象徴機能がある。言葉を話しはじめることは象徴機能がわかりはじめ、自分でも使

える段階に入っていることを意味する。しかし、描こうとするイメージを絵にして、象徴的な絵を描くようになるのは、この時期より1年以上遅くに見られる。およそ2歳半前後からはじまるとされる象徴期のこどもの絵に見られる特徴は、こどもが描いた○（丸）を「ママ」と命名することで、こどもがイメージを持って絵を描いている、と理解されている。イメージを持って絵を描くという視覚的な象徴物の操作が、知覚することや言葉の出現から遅れて現れることをどのように理解すればよいのだろうか。

#### 2・4・1 乳幼児の象徴機能の獲得

私たちは、胎児20週で音を聞くようになる。母親のお腹の中で胎児は母親の言葉を聞きながら生まれる。音声の流れはあいまいで変化が激しい。リサ・フェルドマン・バレットは「乳児は、高く変化に富んだ声の調子、短い文、強いアイコンタクトによって特徴づけられる、大人の発する「赤ちゃん言葉」に、とりわけうまく順応する。」<sup>12)</sup>と述べている。また、新生児は、「驚くほどのスピードで、視覚、聴覚、臭覚、触覚、味覚、内受容に由来する刺激、ならびにそれらの結合によって混淆する雑多な感覚刺激の海を、いくつかのパターンへと分析できるよう学習する。」新生児は身体的な五感刺激を心的に構築してゆく。「言葉は、物質的な外観を超えた、すなわち概念を形成するための心的な接着剤として作用する類似性を見出すように乳児に仕向ける。」<sup>13)</sup>という。乳児は、類似性を見つけてゆきながら、大人との社会生活の中で、言葉の音声リズムと状況とをつなぎ合わせ、自らも喃語を発声するようになる。

今井むつみは『言語の本質』<sup>注7)</sup>の中で、「記号接地問題」をあげ、「ことばが指す対象を「知っている」というのは、単に定義できるということではない。(中略)ことばの意味をまるごと理解するためには、まるごとの対象について身体的な経験を持たなければならない。」というのもリサの見解と一致する。今井は、日本語の獲得が、大きなゼスチャーを伴ったオノマトペが媒介する、という仮説を立てている。その根拠は、下図4のような形を乳児に見せて、視覚的選好法を用いて「キビは?」「モマは?」と問う実験である。ほぼ図4の表示のように注視する。このことは、オノマトペが「日本語」の習得を媒介するだけでなく、オノマトペ的な音声には、形のイメージが結びついていることを示唆している。言葉につながる身体的な五感を合わせた心的構築だけでなく、言葉には共感的な形とのつながりがあることは重要である。



図4：オノマトペ的な音声には形のイメージが結びつく  
(資料『言語の本質』を参考に筆者作成)

このことから、「言葉」は記号接地しているだけでなく、記号的な形を伴った概念として脳内で要約<sup>注8)</sup>されていくものと思われる。

言葉と思考についてはどうか。ヴィゴツキー (Vygotsky) は幼児の言葉が、「外言から内言へと進む背景に、ピアジェとは逆に外言が社会的なものとしてはじまり、次第に個人的な内言へと進む道筋の中に思考の発達過程の運動がある。」<sup>14)</sup>と説明する。外言は図5のように社会的な道具として表れる。このことは、「なぐりがきの時期」の後半に2歳前後に近づくと、つぶやきながら絵を描くことに対応している。そんな時に「これは？」と指さして聞いてみると「おかあさん」と言ったりする。その場にはないものについて表象しようとしているけれど、他の人との間に共感がうまれる象徴として記号としての絵になる直前にみられる。

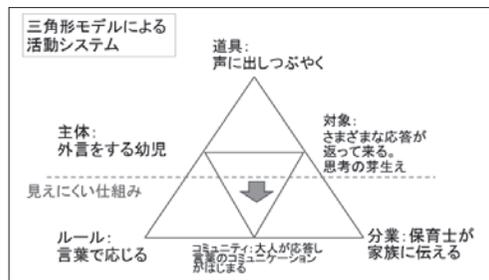


図5：三角形モデルによる活動システム

(資料『拡張による学習』を参考に筆者作成)

外界のものを象徴物に置き換えて再現する過程は、思考が発達して、言葉を獲得しはじめる「なに？」から「なぜ？」への拡張へとつながっていると考えられる。

### 第3章 まとめ

最後に「表現」について考察したい。保育所保育指針（平成30年）には、感性と表現に関する領域「表現」として扱われ、乳児保育が「愛情豊かに応答的に行われる」ことが特に必要とされ、自分の感情などを表し、それに相手が応答する言葉を聞くことを通して次第に言葉が獲得されていく、という記述がある。こどもは誕生後このような応答的な環境の中で育つことが自然な発達につながっていくからである。指針には「表現」の定義はないが、1歳から3歳未満の幼児のねらいとして「感じたことや考えたことなどを自分なりに表現しようとする」という文脈の中にある。ここから読み取れるのは、自分なりに他の人に何かを伝えようとするとき「表現」になる、という意味が読み取れる。伝えようとする「何か（イメージ）」を持つ前は「応答」として分けている。しかし、表現は人間の生にとって根源的な生きる証と捉えて理解することで、障害を持つ人をも包括した表現の受け止めが可能となることを考えると、「何か（イメージ）」を持つ前の行為の痕跡もまた周囲の大人

がその痕跡を「生きていることの証」と受け止め肯定的に捉え応答するのであれば、十分に表現たりえている、と私は考える。

以上のことから、アートとしての生活文化をつくりだす創造性の育ちを造形のはじまりとして捉え直すと次のことが言える。

- 1、造形のはじまりは、生後2カ月の布を引っ張ることによって生まれる布の形の変化からはじまるが、周囲の大人がこの行為を表現として肯定的に捉える（おもしろがる）ことが条件である<sup>注9)</sup>。他の素材で見られる感触あそびは実践者が0歳児のつくる痕跡に肯定的に応答しているので造形のはじまりと言える。
- 2、なぐりがきの時期の絵は、描こうという意識がないのではない。動くもの、変化をおもしろがり繰り返されていることから意識的である。
- 3、乳幼児の発達には、外界の物質的な対象に働きかける子どもの行為を取り囲む大人の応答的な営みによって生まれる。
- 4、乳幼児の発達には、物質的な素材と素材への働きかけが大きく関わっており、造形はおおきな役割を持っている。

## 引用文献

- 1) ベンジャミン・リベット (Benjamin Libet) 『マインド・タイム』岩波書店 2021年 p167、p168
- 2) リサ・フェルドマン・バレット (Lisa Feldman Barrett) 『情動はこうしてつくられる』紀伊國屋書店 2019年 p79、p519
- 3) リサ・フェルドマン・バレット 『情動はこうしてつくられる』 p58
- 4) 鈴木忠 『生涯発達のダイナミクス』東京大学出版会 2008年 第9章世代継承と発達 p285
- 5) J. J. ギブソン (James Jerome Gibson) 『生態学的知覚システム』サイエンス社 (1985) 引用は (2021年16刷版より) p6
- 6) ティム・インゴルド (Tim Ingold) 『人類学とは何か』亜紀書房 2020年 p47 (同ページ2か所)
- 7) ティム・インゴルド 『人類学とは何か』 p50
- 8) ユーリア・エンゲストローム (Yrjö Engeström) 『拡張による学習』新曜社 1999年 日本語版へのまえがき pi
- 9) J. J. ギブソン 『生態学的知覚システム』序章 p1
- 10) リサ・フェルドマン・バレット 『情動はこうしてつくられる』 p192
- 11) J. J. ギブソン 『生態学的知覚システム』序章 p6
- 12) 同 p166
- 13) 同 p170
- 14) ヴィゴツキー (Vygotsky) 『思考と言語』新読書社 2001年 p70

## 参考文献

- ・鈴木忠著『生涯発達のダイナミクス』東京大学出版社 (2008) 第9章世代継承と発達 p295「発達を規定するのは遺伝か環境か?」については「(人の)発達段階は、環境と関係なく時期が決まっているわけではなく、その子どもが育つ環境(社会文化的条件)によって伸び縮みする。」  
富澤美千子『野村芳兵衛の教育思想』春風社 2021年 より、また図2は、2024年6月15日岐阜で行われた野村芳兵衛研究大会での山住勝広の黒板に描いた図を筆者が再現したもの
- ・西崎美穂『描画と痕跡』多賀出版 2015年 第三部痕跡の研究 第4章乳幼児の表現活動 というタイトルで p69～p105に詳細な研究が記録されている。タイトルに乳幼児の表現活動とあるが、考察は慎重である。「乳幼児が表面に情報を見出し、その変更を行ったものだという点から、人間が持ちうる、表面を改変する方法の一部であると言える。単なる表現の前段階にとどまるものではないということは、現時点で主張することができる。」とし、「レッジョ・エミリア・アプローチに知見を求めることができる。」としている。
- ・保育所保育士長解説(平成30年3月)「乳児保育に関するねらい内容」「1歳以上3歳未満の保育に関わるねらい及び内容」より

## 注 釈

- 注1)本校テキスト『造形表現論』p15
- 注2)『感触あそび』山下慶子著かもがわ出版2020年には、生後8～9カ月の乳児が大きな紙の上で絵具あそびをする広島市の口田なかよし保育園の実践が紹介されている。また、WEB上にも多数の実践があげられている。
- 注3)『描画と痕跡』西崎美穂著 多賀出版 2015年
- 注4)J. J. ギブソン『生態学的視覚論』p8
- 注5)2024年9月7、8日に開催された第12回活動理論学会
- 注6)山本尚樹『個のダイナミクス 運動発達研究の源流と展開』金子書房 2016年 p67
- 注7)図4)は、今井むつみは『言語の本質-ことばはどう生まれ、進化したか』中公新書 2023年より
- 注8)リサ・フェルドマン・バレット『情動はこうしてつくられる』「要約」は、感覚ニューロンによって構築された結合が効率的にニューロンの大きな結合としてつながること。概念の構築と予測が双方向につながっている。p202
- 注9)少しの行為の痕跡をアートにつながる表現と認めることにはさまざまな状態で生を営む私たちにとって、多様な観点から意味が大きい。